

## 一般財団法人民主音楽協会

中川 真

民主音楽協会（以下、民音と略）は1963（昭和38）年10月に創設され、財団法人の認可を経て、2013（平成25）年に一般財団法人となりました。創立の趣旨は「人間文化を創造し、音楽をもって、世界の民衆の心と心を結び、平和建設の一助とする」〔池田大作〕というもので、これまで広範な領域で膨大な事業を実施してきました。

民音の事業には大きく分けて演奏会事業と音楽文化事業の2つがあります。演奏会事業では、全国で幅広いジャンルの演奏会を開催し、公演回数は8万回を超えています。海外からの招聘交流事業も数多く、110カ国・地域との文化交流を実現してきました。

音楽文化事業には、①コンクール事業、②青少年音楽文化振興事業、③音楽普及・国際交流事業、④博物館事業があります。コンクール事業は若手音楽家の登竜門として〈声楽〉〈指揮〉〈作曲〉〈室内楽〉部門で実施され（現在では指揮部門のみ）、特に20回にわたって開催された作曲部門の「民音現代作曲音楽祭」は現代音楽の創造に多大な貢献をしてきました。青少年音楽文化振興事業では、全国の小・中・高校に「学校コンサート」を提供し、4,600校以上で開催してきました。特に東日本大震災の翌年から実施している、岩手、宮城、福島の被災3県の小中学校を対象とする「東北希望コンサート」は包摂的な活動として貴重です。音楽普及・国際交流事業では、地域振興の市民コンサートをはじめ、京都、大阪、横浜で開催する「留学生音楽祭」の実施、海外派遣などを行っています。博物館事業としては、約30万点の音楽資料を所蔵する「民音音楽博物館」において、楽器等の展示、楽譜・音楽図書等の貸し出しなどを実施しており、民間では日本で最大規模の音楽博物館となっています。

小泉文夫音楽賞委員会が着目し、評価したのは、民族音楽学者とともに実施した西アジア、東南アジアでの音楽文化の調査並びに招聘・交流事業についてです。特に西アジア地域の調査は3次、計141日にわたる本格的なフィールドワークとなり、新知見を多くもたらしました。第1次（1977）ではモンゴル、ソ連、パキスタン、ネパール、インドに赴き、モンゴルの民謡形式であるオルティン・ドー（長い歌）と日本の馬子唄のつながりとともに、ゆったりとしたオルティン・ドーと拍節的なボグン・ドー（短い歌）の共存が西方のイランやハンガリーにまで見られるといった、音楽の伝播を印象づける貴重な基礎資料が収集されました。第2次（1980）では中国とパキスタ

ンに赴き、敦煌莫高窟の壁画や新疆ウイグル自治区の遺跡(クチャ)調査での世界初の本格的な音楽舞踊壁画群の考察が実施され、正倉院に現存する楽器との比較考証が行われました。また、天山北路(イリ、ウルムチ)と天山南路(カシュガル、クチャ)における擦弦楽器レワープの奏法や調絃の綿密な調査によって、三味線や琵琶の源流が示唆されました。第3次(1982)ではトルコ、インド、中国に赴き、各地で上演されている旋回舞踊に焦点を当てて、その宗教的、美的意味が考察されました。

以上、少し詳しく紹介したのは、この3次の調査に民音の学術的アプローチに対する方向性や思想が集約されていると思われるからです。ボアズらに源を発する文化相対主義は1970年代に一気に人口に膾炙し、民族音楽学に多大な影響を与えました。民音の調査は、アジア(あるいはユーラシア)における音楽文化の交渉史に焦点を当てたものですが、日本の音楽をアジアの中に位置づけ、相対化していこうという視点がありました。それは逆に言えば、日本においてアジアの音楽への関心を大いに高める役割を果たしてきたのです。

民音の特筆すべきところは、学術的な調査すなわち専門家のための知識のストックを身内に埋没させることなく、コンサートやセミナー、ワークショップという形で一般社会に還元してきた点です。後の東南アジア調査の成果も含めると、民族音楽・舞踊の公演は全部で8,579回という驚くべき数になります。逆に、その数があまりに多いために、基となっている調査活動が注目されてこなかったくらいがあります。その調査を担っていた専門家のなかで最大の功労者が小泉文夫氏です。逆に、小泉氏の魅力的な語りの源泉はこれらの調査にあったとも言えます。民間の文化セクターと国立大学の研究者の奇跡的なコラボレーションだったのです。小泉氏が亡くなった後も調査は続けられ、西アジアへは柘植元一氏、藤井知昭氏、小柴はるみ氏、東南アジアへは三隅治雄氏、田村史氏、山口修氏、徳丸吉彦氏といった当代の錚々たる専門家が協力者として名を連ねています。

また、研究部門では、音楽博物館付属の民音研究所の活動がユニークです。「平和構築の音楽研究」を中心テーマとしており、国際伝統音楽学会(ICTM)、米国・民族音楽学会(SEM)などの国際会議において応用民族音楽学や「音楽と社会包摂」などのシンポジウムに取り組むとともに、世界各地から研究者を招聘し、紛争や暴力と対峙する音楽の働きなどについて議論を深めています。

以上のような豊かなりソースをもつ民音の実績と将来への期待を込めて、この度の授賞が決定されました。

(大阪市立大学都市研究プラザ特任教授)